伴大納言絵詞

岩波写真文庫　128

伴大納言絵詞
128

岩波写真文庫 128 伴大納言絵詞

編集 岩波書店編集部

監修 奥平英雄

写真 岩波映画製作所

源氏物語絵巻、信貴山縁起、鳥獣戯画、それにこの伴大納言絵詞の四作品は、絵巻の世界を支える四本の柱であり、かつ日本絵巻の系譜の主流をなすものである。中でも伴大納言絵詞は、その題材が歴史上の逸話を扱っている点で珍しく、その波瀾に富む事件を主題としている点で興味溢れるものがある。この絵巻の作家は絵巻物の秘密をよく心得ていて、巻をひらくにつれて変転きわまりない画面を展開してみせる。その卓越した構成力と相まって、その秀でた描写の手腕は、流暢な描線と豊かな色彩で、ここに人間世界の葛藤を活写してあますところがない。

目次

上巻 応天門炎上
　　 良房諫言

中巻 冤罪赦免
　　 童の喧嘩

下巻 舎人の喚問
　　 伴大納言の配流

定価100円 1954年11月10日第1刷発行 1958年5月20日 第2刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

応天門事件のこと

清和天皇の貞観八年(八六六年)閏三月十日の夜、宮城大極殿前面の応天門に火災が起り、その左右に連なる棲鳳、翔鸞の両楼も延焼した。応天門は大内裏八省院の正門であって当時一国の政治を司る最も枢要な一郭の大門をなしていたから、この門の火災は軽視できぬ大事件であった。大納言伴善男はかねてから左大臣源信と仲が悪く、前にも信を陥れんとしたことがあるが、ここでもまた信が人をして放火させたものだとして、その処分を右大臣藤原良相に謀った。良相は善男の言を信じ、参議藤原基経をして信の邸を囲ませようとしたが、基経は太政大臣藤原良房があずかり知らないのを覚り、これを良房に告げた。良房は大いに驚き、直ちに参内して信のために釈明に努めた。そこで天皇もこれを諒とされ勅使を遣わして信を慰諭された。

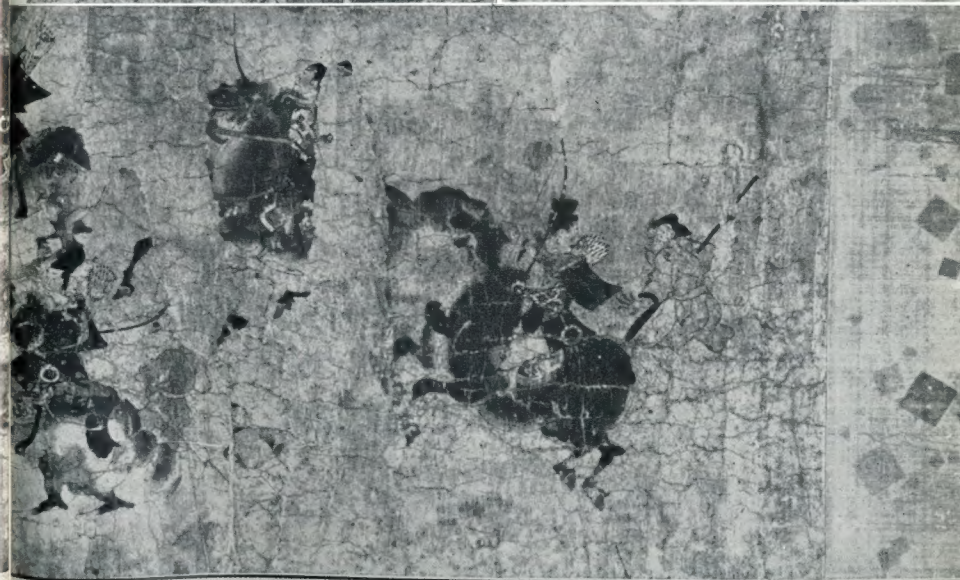
そもそもこの伴善男という人物は、従四位上参議伴国道の子で天性才智に富み、弁舌にもすぐれ、政治法律にも通達した敏腕家であったが、その性格は残忍冷酷で他人の短所を指弾して憚らなかった。源信は彼のためにまさに陥れられんとしたのであった。ところが貞観八年八月に至って、大宅鷹取なるものが応天門の火災は善男らの仕業であると告発した。善男は極力その事実を否定したが、善男の従僕の取調べによって、善男自身は手を下さなかったが、その子中庸をして放火せしめたことが判明した。九月二十二日裁判が確定し、死一等を減じて遠流に処することとなり、善男は伊豆に、中庸は隠岐に、その共謀者として紀豊城は安房に流された。そしてこの事件以後、上古からの豪族であった大伴氏と紀氏とは中央政界から離れ、衰えてしまった。そして藤原氏の勢力のみ独り強大なものとなって行った。応天門事件の経緯は大体以上のようなものであるが、この事件の背後には、当時の貴族たちの陰謀政治の傾向が大いに起因したともいわれている。いずれにもせよこの事件は、当時の貴族たちの複雑な政争の間から生れたものである。

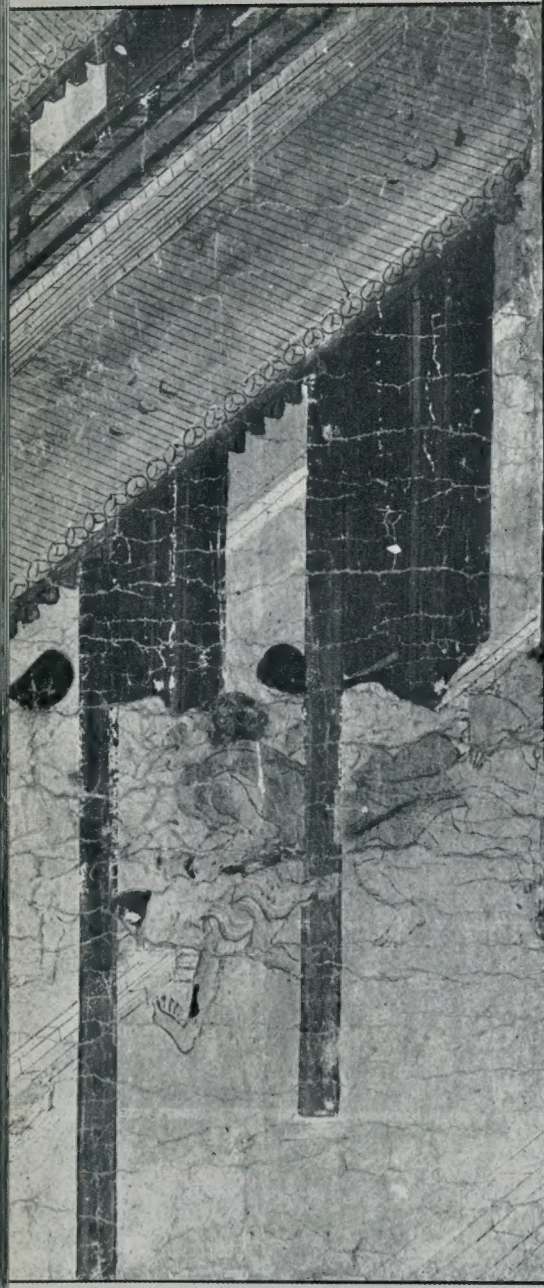
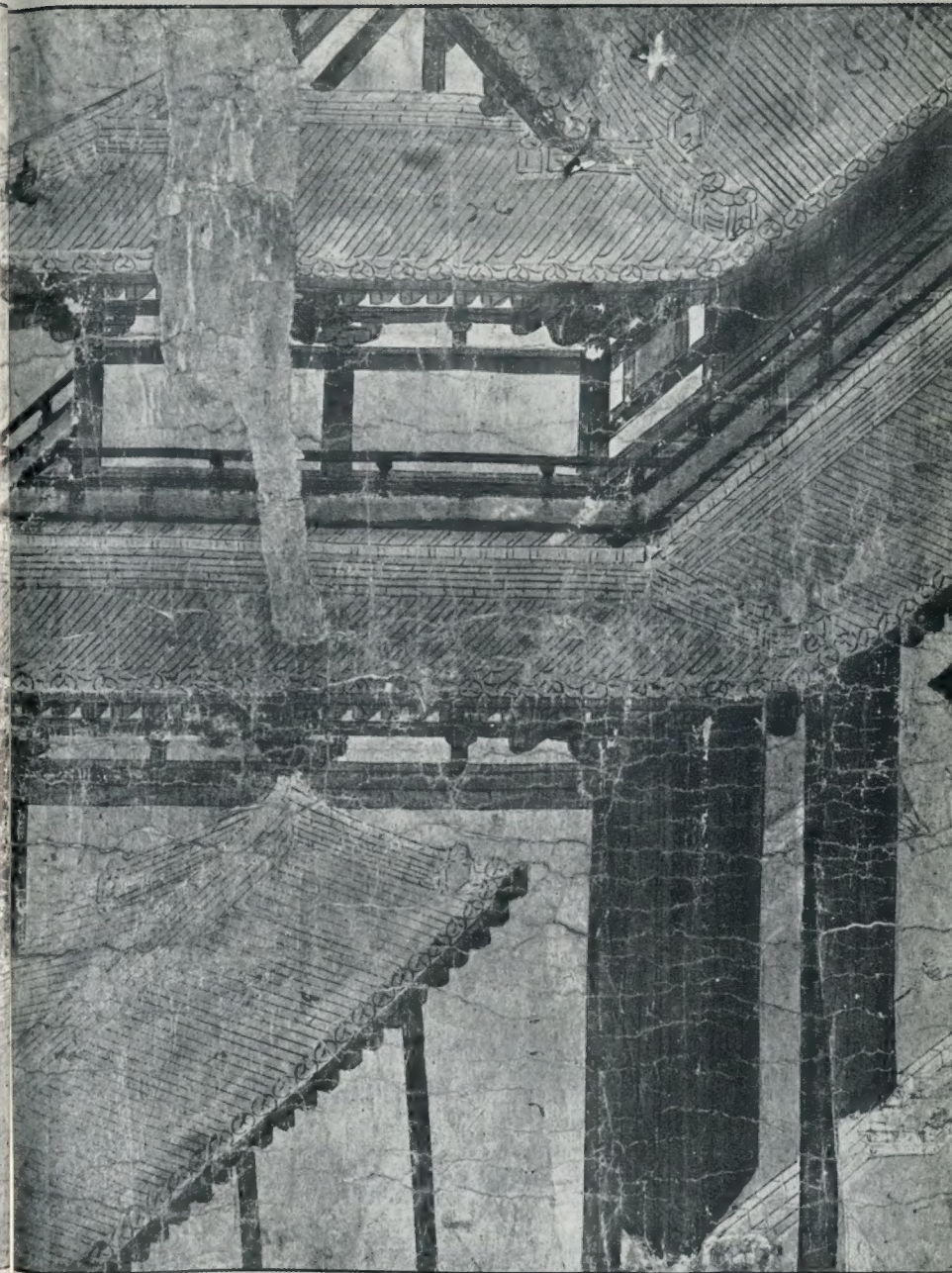
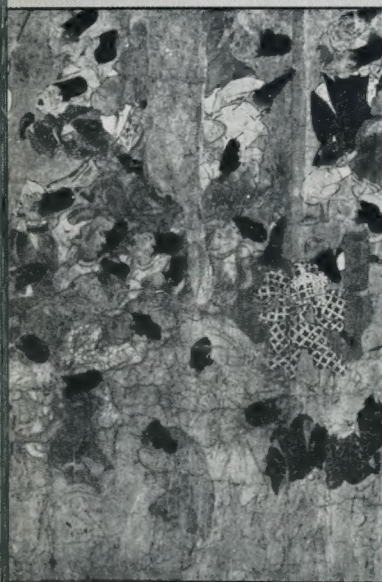
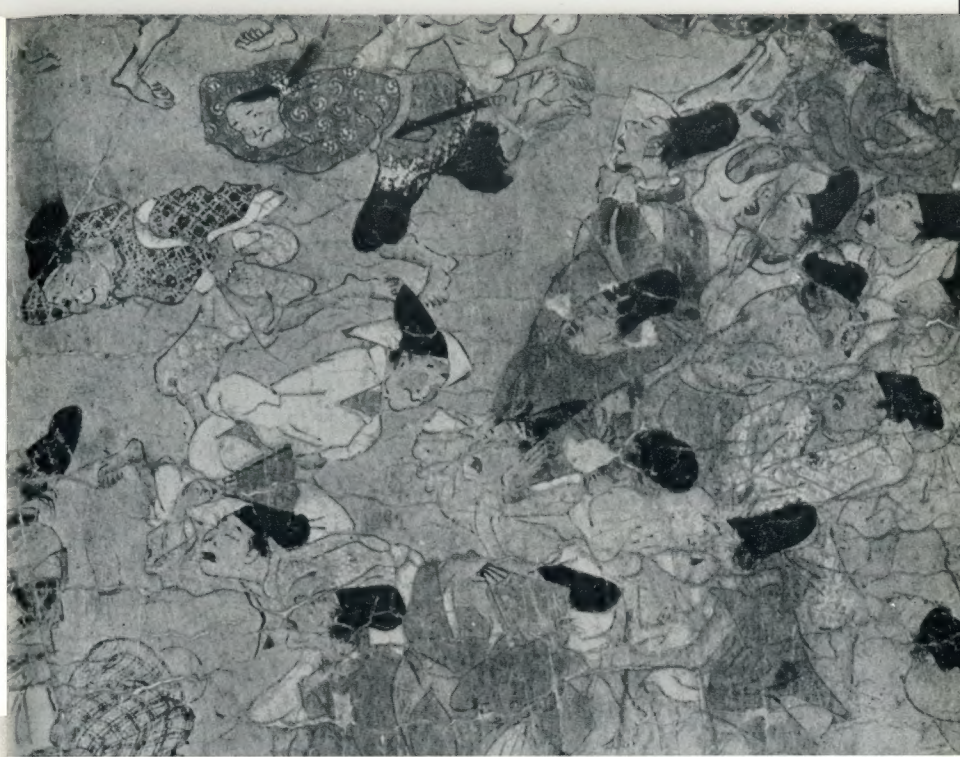
伴大納言絵詞三巻は、こうした歴史的な大事件を題材として画いたものである。ただしその材料は「三代実録」などの正史に拠らないで、以上の史実を潤色して出来上った歴史的説話に拠っている。日本の絵巻は大体詞書(文章)と絵とで構成されるのが原則であるが、この絵詞の上巻には詞がない。そのため完本とはいえないが、その物語の筋は中巻、下巻の詞書とほとんど同文の内容をもっている「宇治拾遺物語」の中の「伴大納言応天門をやく事」の条によって、その欠を補うことができる。従って伴大納言絵詞を研究するものは、当然この宇治拾遺物語の一文を一読する必要があろう。いまこの物語とほぼ同文の内容を題材としたこの絵巻は、正史が伝えるところの複雑な政争の経緯等は避け、応天門炎上の凄じい火事場とか、また善男の罪の暴露する原因となった喧嘩場のごとき、民衆の好奇心に訴えるような話譚を中心として描かれているのである。

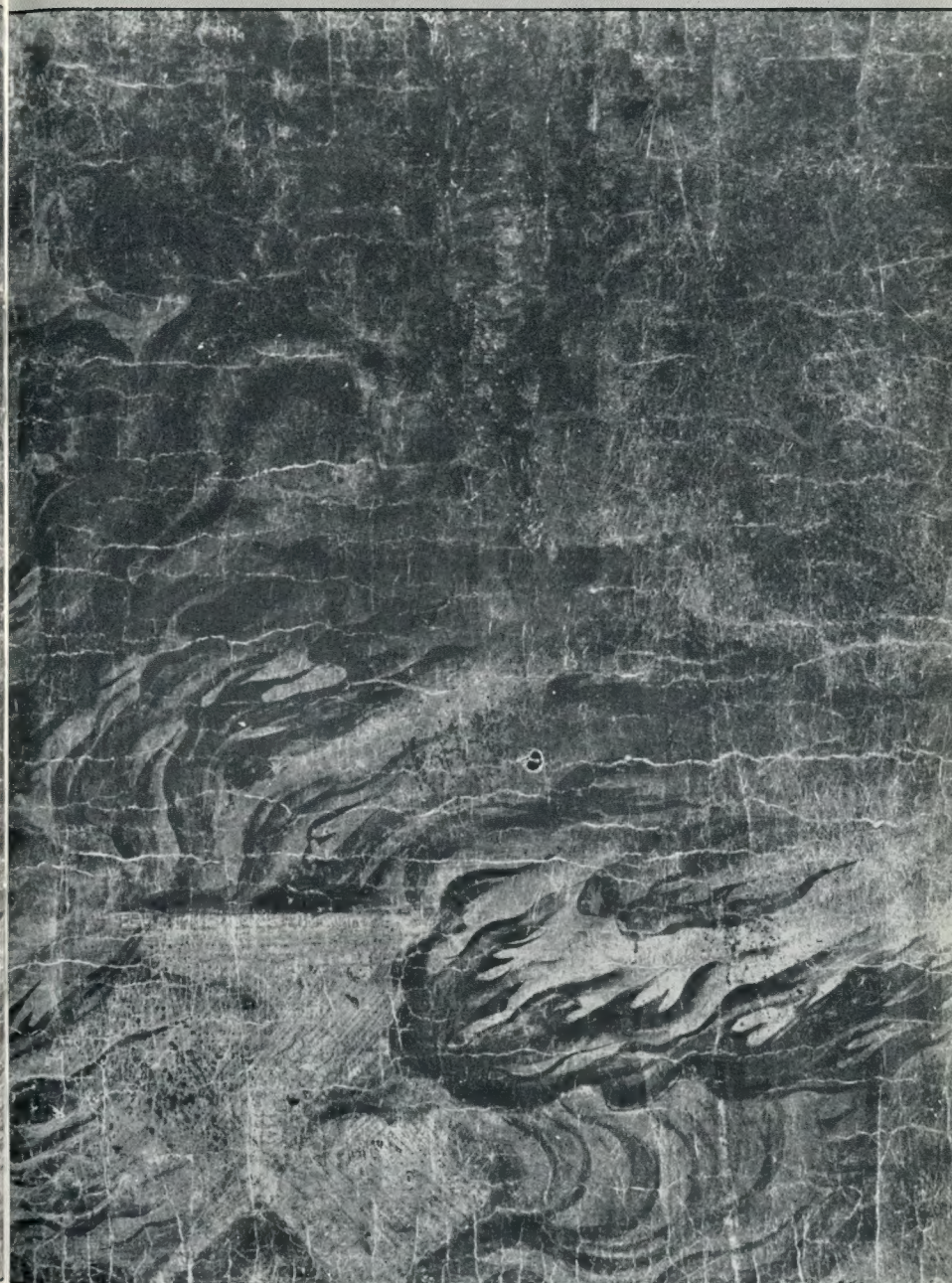
本来絵巻物の面白さは，両手で披いたり巻いたりしながら，数尺ずつ順次に見て行くところにある．とりわけ伴大納言絵詞のように，長い連続式構図のものにはその感が深い．この本では，原作の妙味をできるだけ発揮するように，写真の配置を工夫したけれども

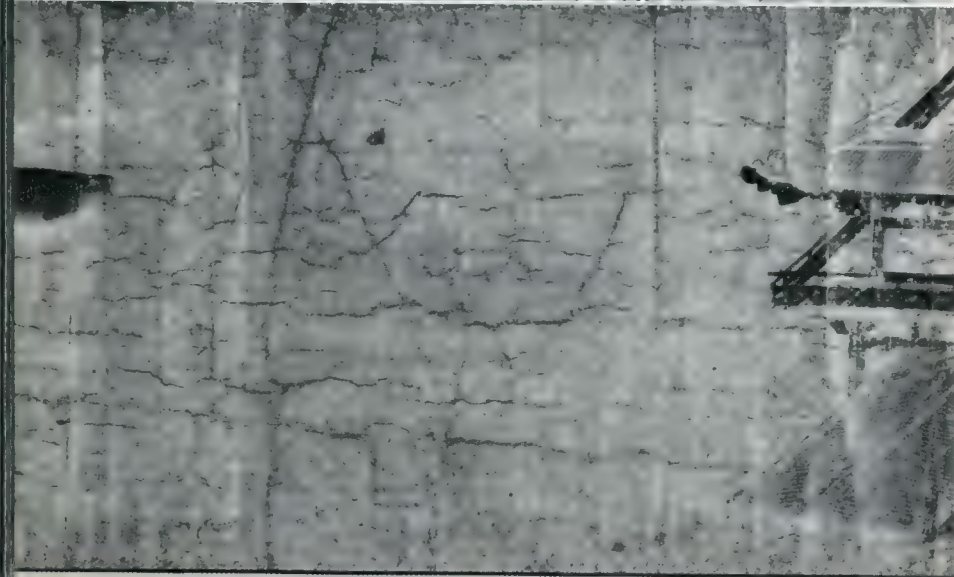
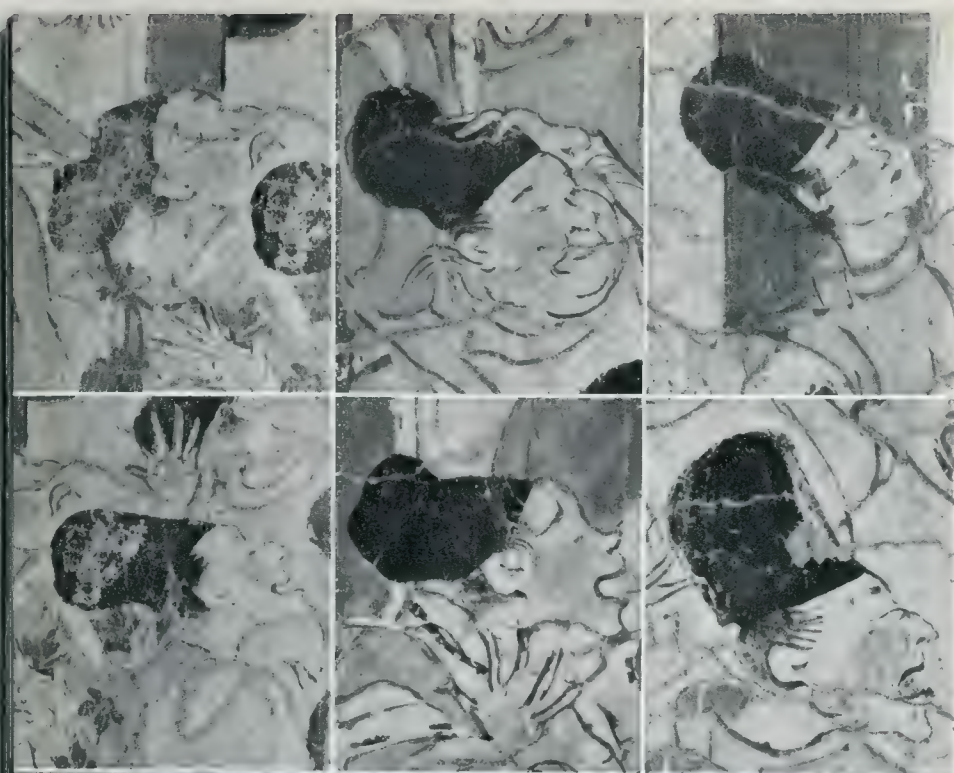
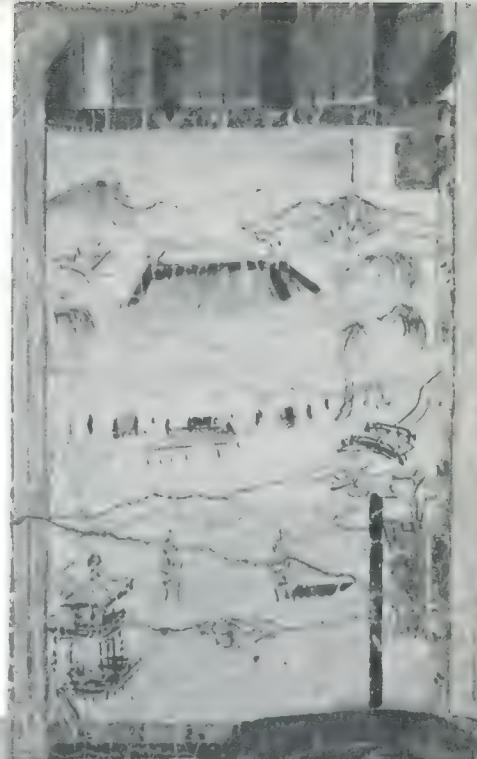
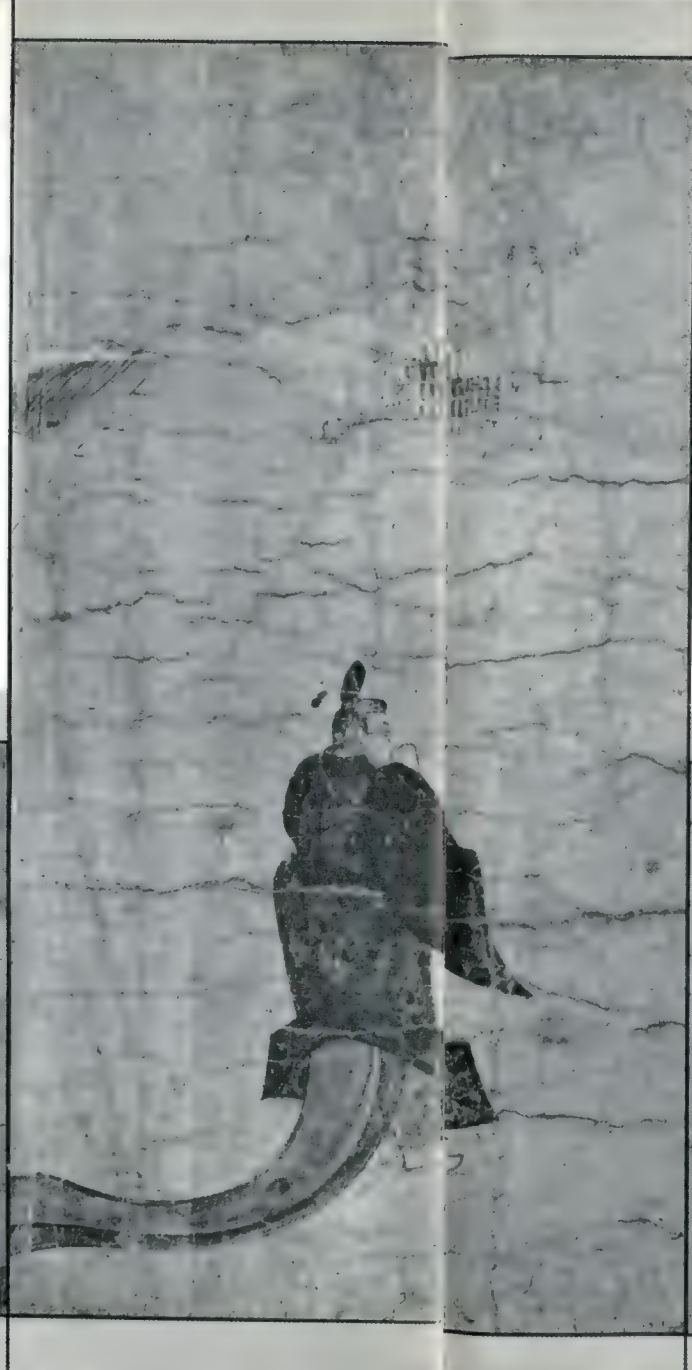
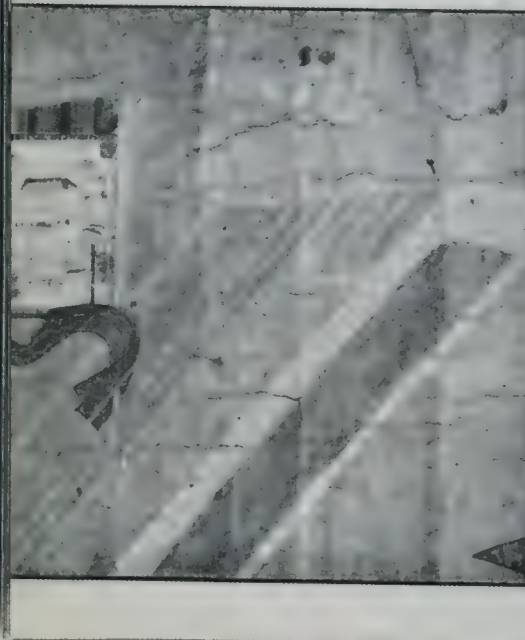
しかし巻物を冊子本の形で紹介することの弱点は避けられない．そこで表紙とこの頁で全巻をひと目で見られるような紹介法を試みた．読者はこれから展開される場面場面とこの全巻紹介の画面とを参照しながら，この絵巻の構成の面白さを，掴んでもらいたい．

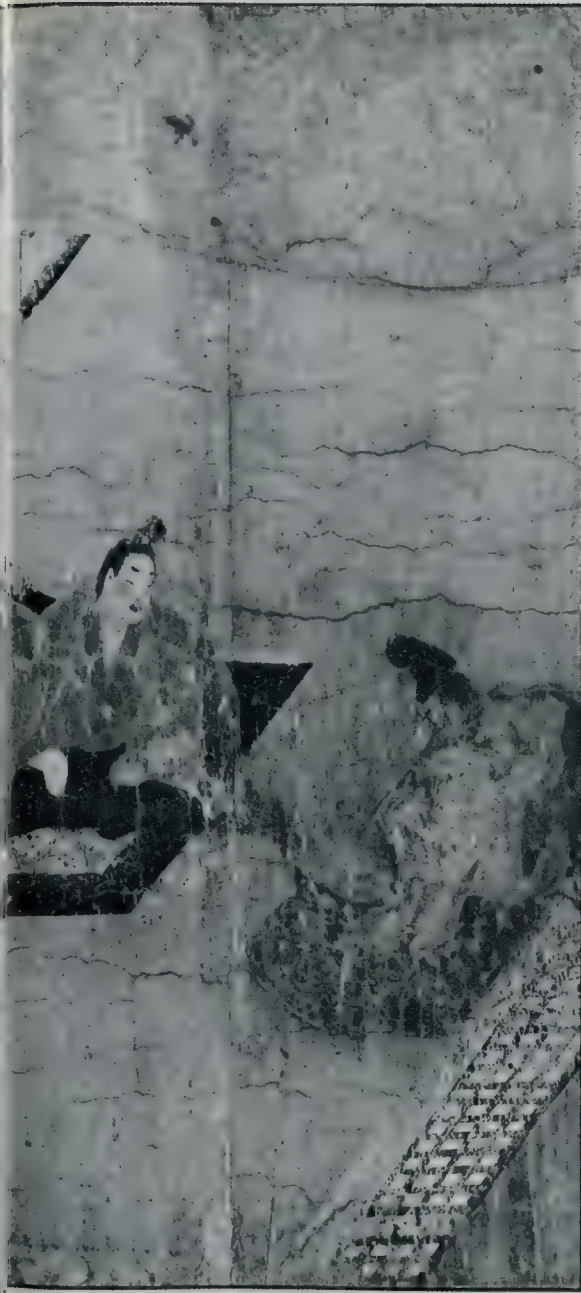
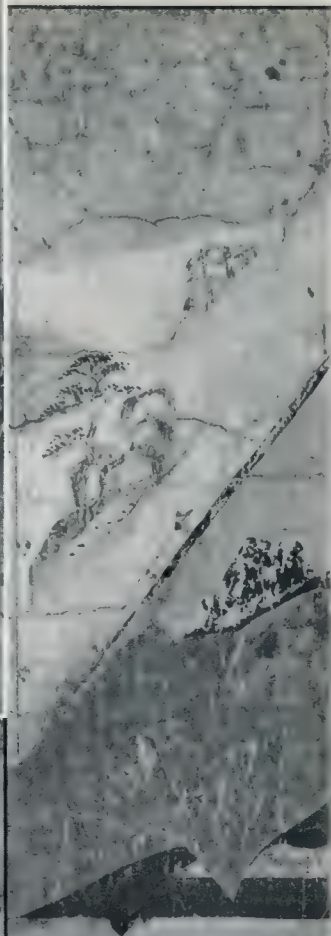
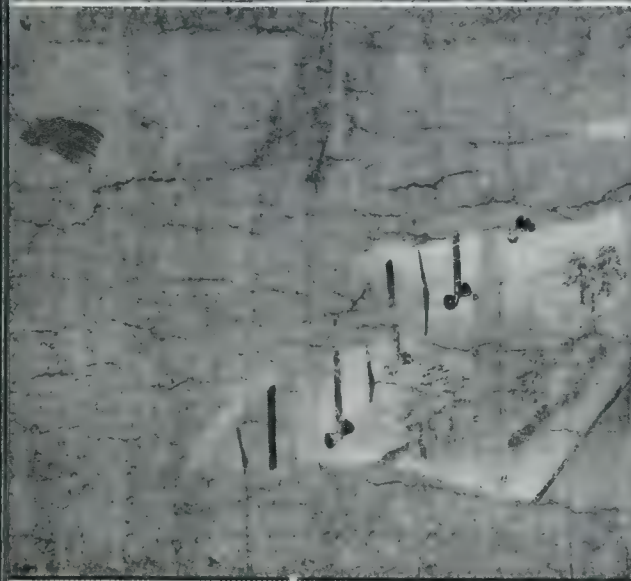
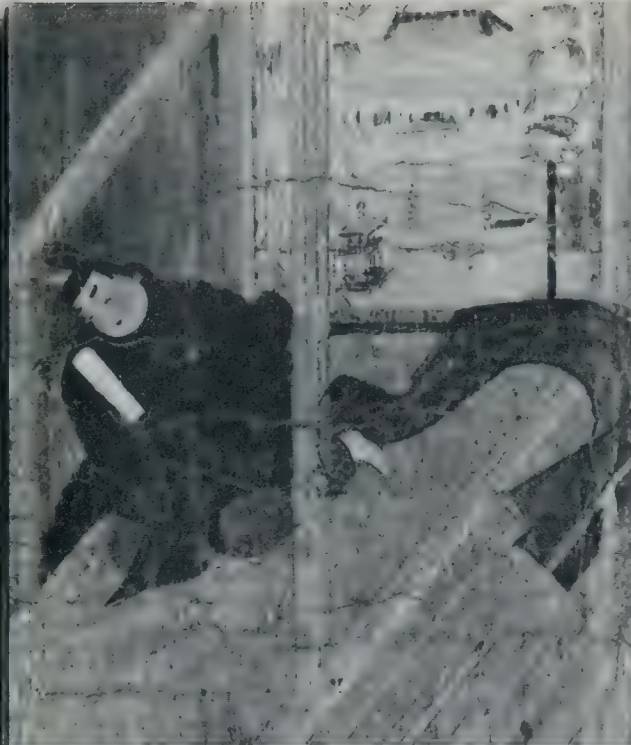
上巻

（第一段・応天門炎上）—この絵巻は応天門炎上の知らせに驚いた検非違使庁の役人が、応天門につらなる朱雀大路を馳けつけるところから始まる。松明をかざした二人の火長（六頁）を先に立て、騎馬の廷尉（左方、損傷して姿は明かでない）が、同じく馬上の五人の随兵を率いて先を急ぐ。その間には馬の口取、弓持、鉾持や松明を背負ったものなど十数人の従者がまじっている。まずこうした慌しい人馬の動きから始まっている。普通日本の絵巻は、文章（これを詞または詞書と呼ぶ）と絵とから成り立ち、各段の絵の前に詞をかくのが原則となっているが、この上巻には詞書が欠けている。これには最初からなかったとする説と、後に失われたとする説とがあるが、然しこうして詞なしにいきなり絵が展開するのも、却って劇的な印象を与える。

画面は、前頁にくらべると動勢にようやく速度が加わる。松明を高く挙げ、後に来る人人と連絡をとる火長、その前万を幾つかの小群が、それぞれさまざまな形をとって前方へと勢よく走る。落ちかかる烏帽子を手で押えながら走るもの、前かがみに駈けつける稚児、全力を出して馬を飛ばす公家、その馬に注意しつつ走りつづける三人の男、草履を片手に横っ飛びに飛ぶ僧侶など、次第に画面は生彩を帯び、活発となり、そして観者の心を前へ前へと誘ってゆく。

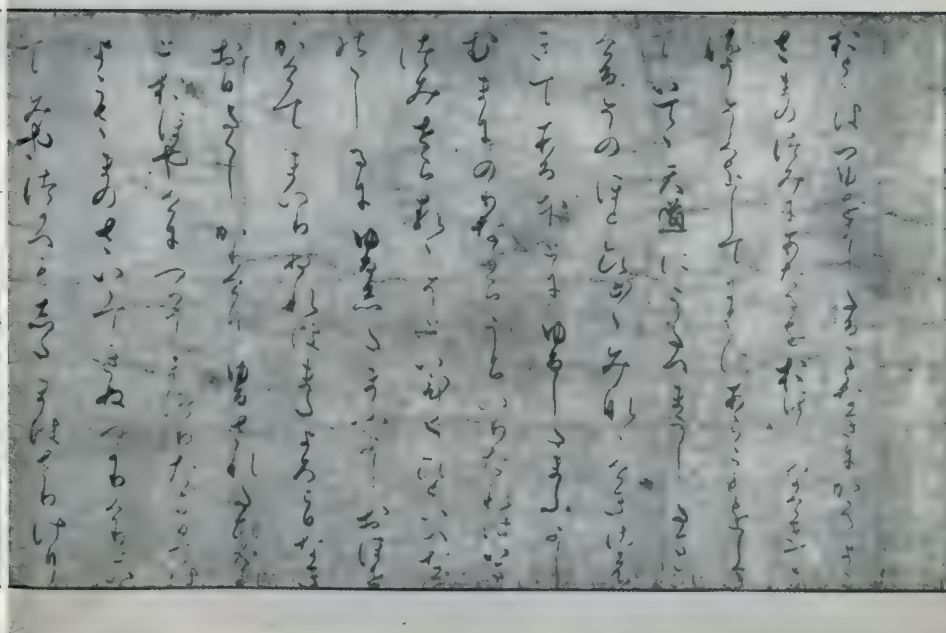
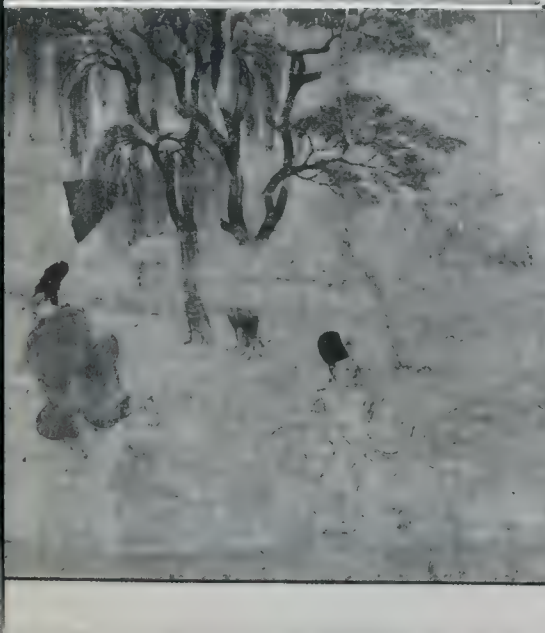
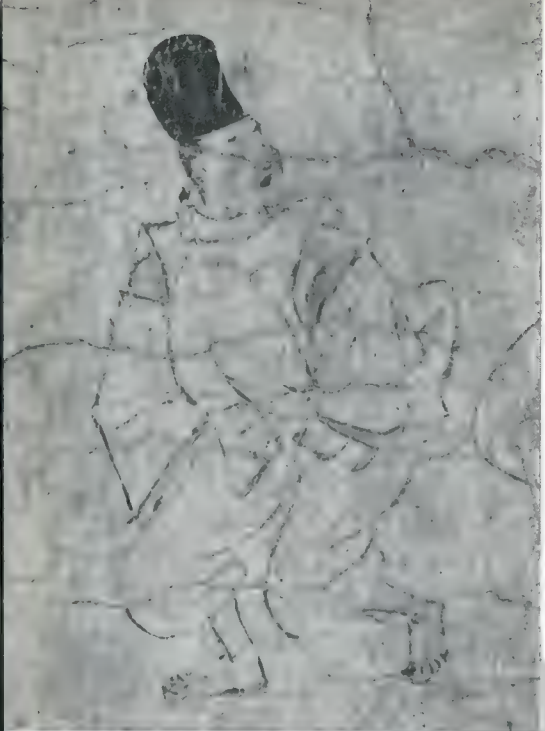
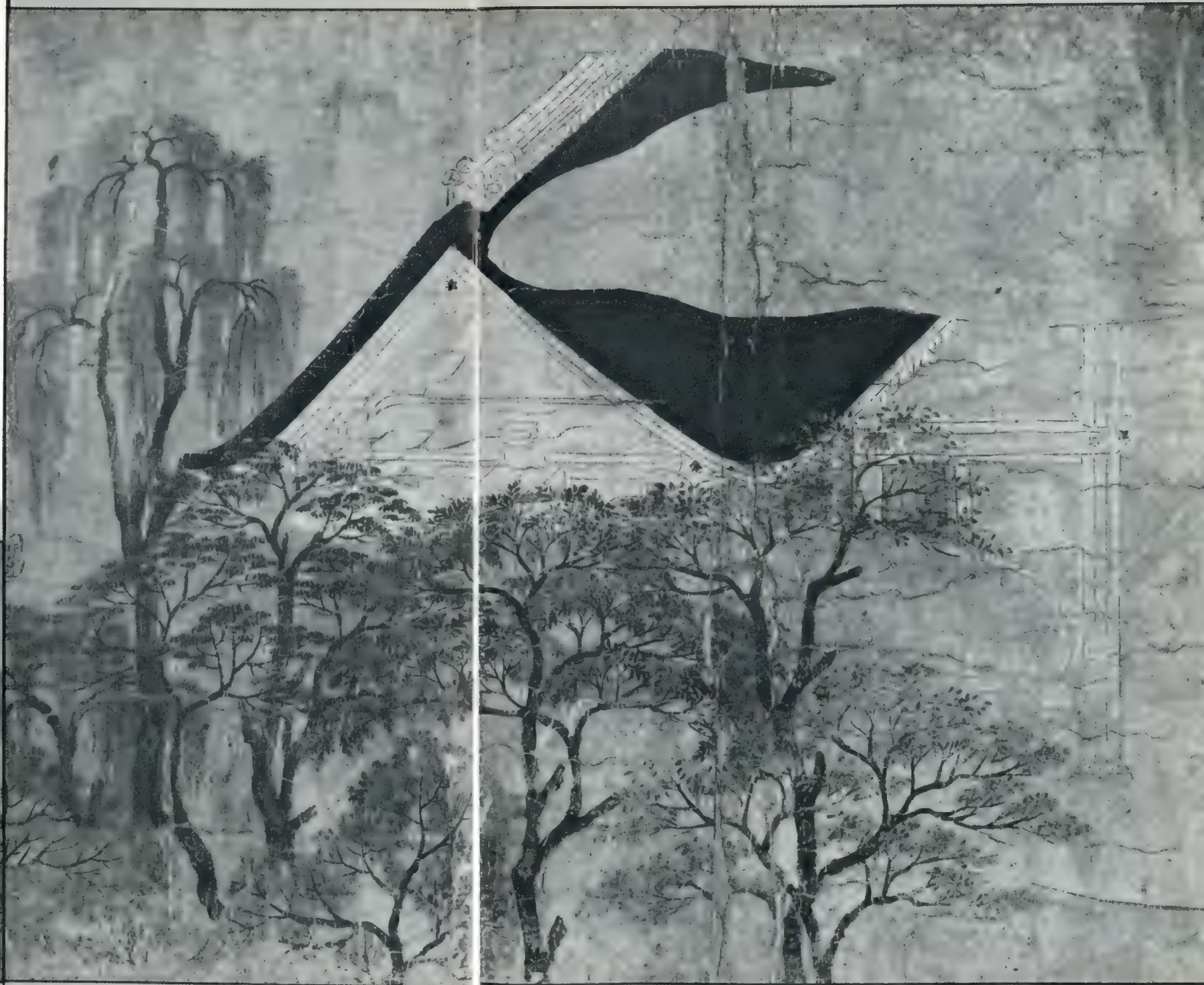
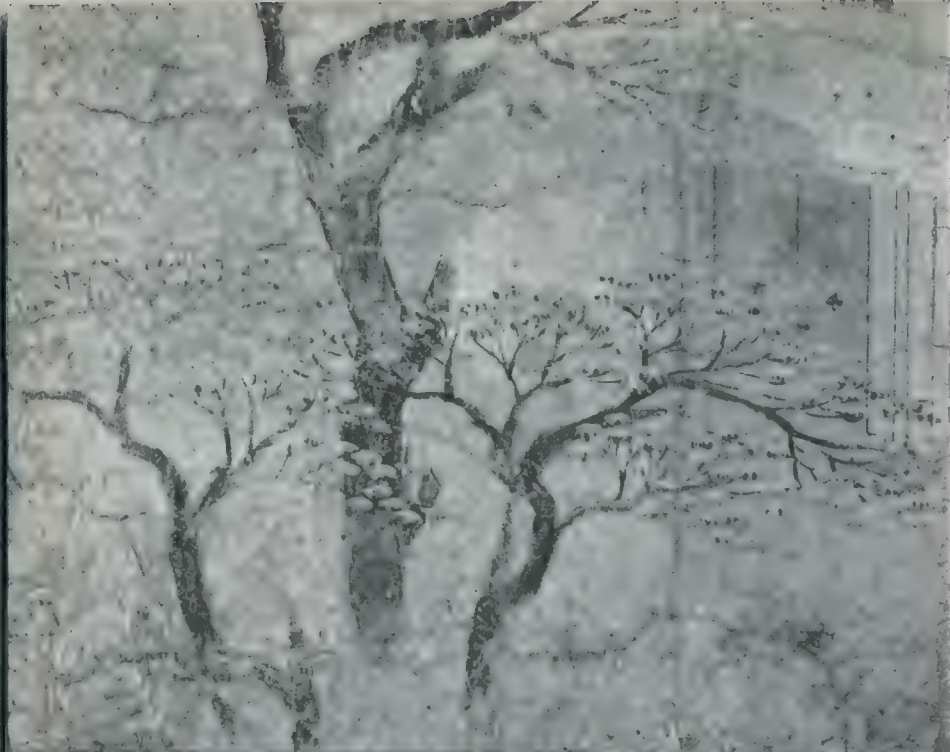
横っ飛びに飛ぶ僧にひきかえその手前の一人は立ちどまって驚き顔、これは近づく火勢を見上げて驚歎しているのであろう。左手の朱雀門の屋根の上には火の粉が降っている。画面は刻々緊張を帯びてくる。驚き騒ぐ馬、その馬を乗り棄てて先を急ぐ武人、朱雀門の高い石壇を両手と片足をかけて攀じ登ろうとする男、杖をつきながら息せききって石段をかけ上る男、門をくぐろうとする一群のもの、中には一人の童もまじって手をひかれながら駈けて行く。かくて画面は応天門に近づくにつれて急速調となる。こうして前へ前へと急ぐ群衆にいざなわれて、観者であるわれわれも、あたかもその一員となって先を急ぐ。

朱雀門を通過するに際し、この門の説明をしておこう。朱雀門は大内裏外郭十二門の一つ。内裏の南側中央の正門に当る。内は応天門、外は平安京南端の羅城門と相対し、朱雀大路より宮城に入る入口に当る。桓武天皇の延暦十三年、大内裏を経営されたとき大伴氏がこれを造った。大きさ七間、戸五間、重層入母屋造。これに対し、会昌門(一八頁)は大内裏八省院二十五門の一つ、南内門ともいう。南面の門で応天門と相対している。朱雀門と同じく桓武天皇の延暦十三年の創建。五間、戸三間、重層入母屋造である。

朱雀門を一歩入ると光景は一変する。応天門から吐き出される黒煙は、長々と画面の上部を覆うて、門内の空地に集った群衆に迫りくる。この凄絶な光景に圧倒されて、ただ呆然と立ちつくすもの、降りくる火の粉を避けようと右往左往するもの。この群衆の数は七十余人、その人物個々の姿態顔容の描写は千変万化、その一人一人の心の動きさえ読みとれるほどである。しかもこうした多数の群衆を捉え一個の集合体としての描写にも成功している。

これこそ応天門炎上の光景、この絵巻の眼目たる最も重要な場面である。渦巻く火炎と蒙々たる黒煙に包まれて燃えつづける応天門。紅蓮の炎と漆黒の煙とは渦を巻き咆哮し未来永劫にわたって止まるところを知らぬかに見える。火炎の描写は、日本絵画史上幾多の例品を見るが、かかる狭い天地に、このように壮観でかつ迫力あるものを他に見ない。我々はこの画面と相対して一種の威圧さえ感ずる。

炎上する応天門をはさんで会昌門との間に、また百人ばかりの群衆が燃えゆく門を見守っている。ここは風上なので朱雀門内の者たちよりやや落着いている。人物も布衣の従者をつれた衣冠姿の官人が多いが、そのほか垂髪の女房や髪を上げた下司女も交っている。その姿態表情の変化に富み、心理的な描写の巧みなこと朱雀門の場合と同じだ。

以上開巻劈頭よりこの会昌門までの画面は、応天門を中心とする火事場の或る刹那の光景を描いたものにすぎない。然し我々は画面の展開につれて、応天門にかけつける群衆と共に、疾くまた遅く、走りまたは止り、突進しまたはせかれながら、些かの緩みなきテンポでここまで引かれてきた。これはこうした一刹那の光景を、二〇尺にも及ぶ連続式構図にまとめ上げた画家の豊かな構想と、優れた技法とによるもので、その傑出した構成力は全く驚歎に値する。

（第二段・良房諫言）会昌門を見送ると、門の廊の屋根にかかる霞が流れて、その先はしばらく空白となり、前の喧騒と打って変り至極の静寂となる。霞の間に遠く檜皮葺の屋根が見える。なお霞の行方を辿ると忽然として一人の貴人が現われる。霞はこのように前の場面に静かな休止符を打ち、次の場面を静かに展開させる時に用いられている。

この絵巻は前にも述べたように、上巻には肝腎な詞書がないので、ここに新しく展開される場面はこのままでは理解しにくい。しかし中巻、下巻の詞書が宇治拾遺物語の本文と酷似しているので、宇治拾遺を参照することによりこの場面は正しく理解することができる。すなわち宇治拾遺によれば、応天門の炎上は左大臣源信のしわざだと伴大納言が申立てたので、朝廷では信を罰しようとされた。当時太政大臣藤原良房は弟右大臣良相に政を譲って白河に隠棲していたが、このことを聞き驚いて宮中にかけつけ、事件の真相を糾明すべきことを奏上した。帝も誠と思召し、ついに信の罪の無実を知って赦免の宣旨を下され、良房もこれを承って帰ったと述べてある。二〇―二三頁の絵は、すなわちこの内容に相当する場面を描いている。

この場面、清涼殿内の茵の上に、褻の御装束(平常服)で坐っていられるのは清和天皇。御前に於て奏上する立烏帽子、直衣姿は良房、御簾を隔てて昆明池の障子の前の弘廂に伺候しているのは蔵人頭とおぼしく、これは宇治拾遺に見える宣旨の使者頭中将と解釈していいかと思う。前頁、清涼殿の東庭に立つ束帯姿は同じくこの蔵人頭を示し、いまや宮中に召されて伺候するところを描いたものと解される。二〇―二三頁の場面は学者の間に種々の解釈が行われているが、私は現在のところ右のように解釈しておきたい。

中巻

(第一段・冤罪赦免)―まず巻頭にこの絵巻最初の詞書が現われる。その詞書を読んでみよう。『おとゝはつゆをかしたることなきにかゝるよこ」さまのつみにあたるをおほしなげきて日の」さうそくをしてにはにあらこもをしき」ていてゝ天道にうたへまうしたまひ」けるそのほとひとゝくみなゝけきさは」きてあるほとにゆるしたまふよし」むまにのりなからうちいりたれはいまは」つみせらるゝそといひてひといへなき」のゝしるにゆるしたまふよしおほせ」かけてまいりぬれはまたよろこひなき」おひたゝしかりけりゆるされたひたれ」とおほやけにつかうまつりたまひては」よこさまのさいゝてきぬへかりけりといひ」てみやつかへもしたまはさりけり』と記してあり、ついで絵は左大臣邸に赦免の使者の従者が駈けこむところから始まる。立烏帽子に狩衣を押折とし袴を高く、くくり、草鞋がけで急ぎに急いで門内に駈け入らんとしている。続いて絵は左大臣が天道に訴えるところ、奥の間に女房達の悲歎するところを展開して第一段を終る。

次に第二段の詞書(三六頁)があって、大体次のようなことが記してある。右兵衛の舎人なるものが、以前夜更けて帰る途中、偶然伴大納言親子の放火の現場を見た。然し迂闊に口外すべき筋のものではないので黙っていた。ところが意外なことが起った。それはこの舎人の子と、隣家に住む伴大納言の出納の子とが喧嘩を始め、出納が舎人の子を手ひどく蹴倒したことから舎人と出納の口論となった。そして舎人の口走ったことから伴大納言陰謀の秘密が端なくも露見する経緯である。

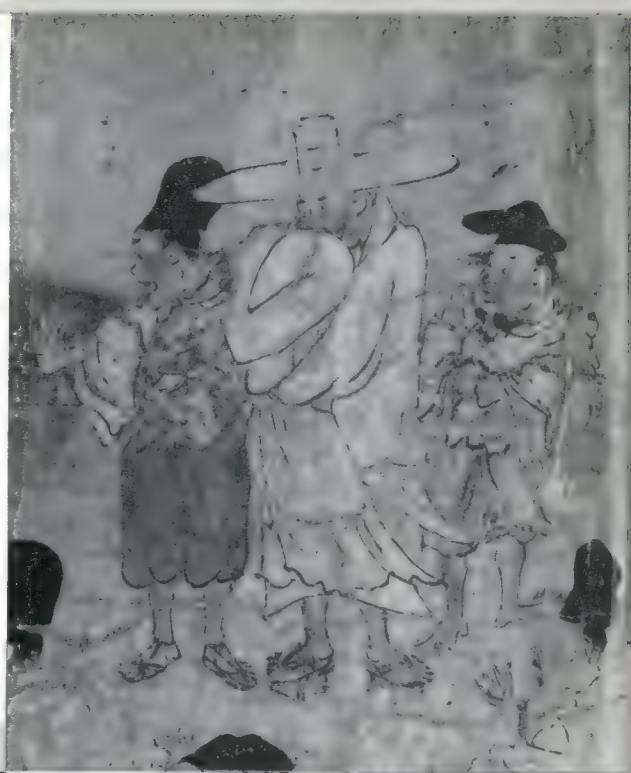
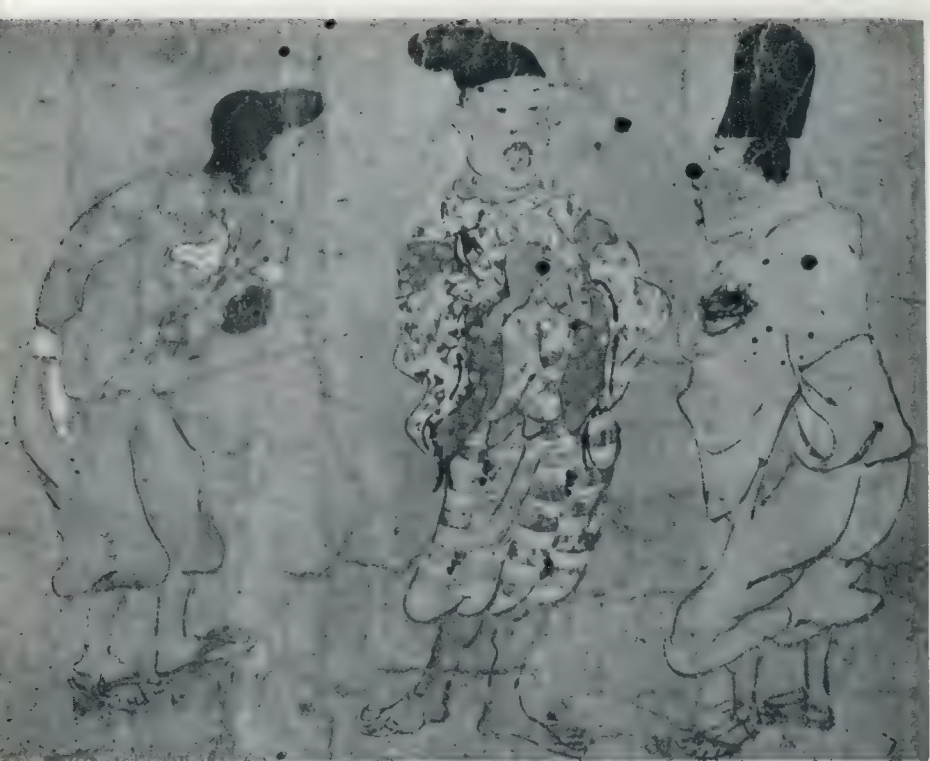
ここでこの絵巻の筆者に触れておく。この絵の筆者に擬せられている光長は、従来藤原、土佐、春日などの姓を冠していたが、最近では常盤光長と呼ぶのが正しいとされている。光長は平安末葉の傑出した画家の一人で、承安三年には最勝光院御堂御所の障子に日吉御幸の絵をかき、また後白河法皇の命で「年中行事絵巻」六十巻などをかいている。次に詞書の筆者は従来藤原雅経といわれていたが、最近では雅経の従祖父に当る世尊寺流の直系藤原教長(一一〇九―一一八〇)説が行われている。教長は和歌と書をよくし、崇徳天皇に仕えてその寵遇が厚かった。この詞書は線質に粘りがあり、運筆に重厚の風のあるのが特徴である。

前の頁の門外に漂うていた霞は、流れてここでは門の屋根の上にかかっている。その霞の流れは静調で一つの場景を見送るとともに、また一つの新しい場景を迎える。こうして霞を用い場面を流暢に転換させて行くのは、絵巻の一つの手法となっているが、信貴山縁起と共にこの伴大納言絵詞は特にこの手法が巧みである。さてこの門を通過すると門内には近衛の舎人と童とが駈けている。この前方の空白には一個所切りとられた痕跡がのこされている。

前の頁の舎人と童とが駈けている前方にあるという痕跡は「ゆるしたまふよしむまにのりながらうちいりたれは」と詞書に記してある馬上の使者の図の剝ぎとられた痕で、この図は最近発見されたという。この馬上の使者の前方に当るところ、中門前馬道際に先駆の舎人が駈けながら事の由を触れている。細緌の冠に緌をかけ、壺胡簶に野太刀を佩き左手に弓をもっている。これは前頁の舎人と同じ装いである。霞はこの中門をかすめてさらに前へと流れる。

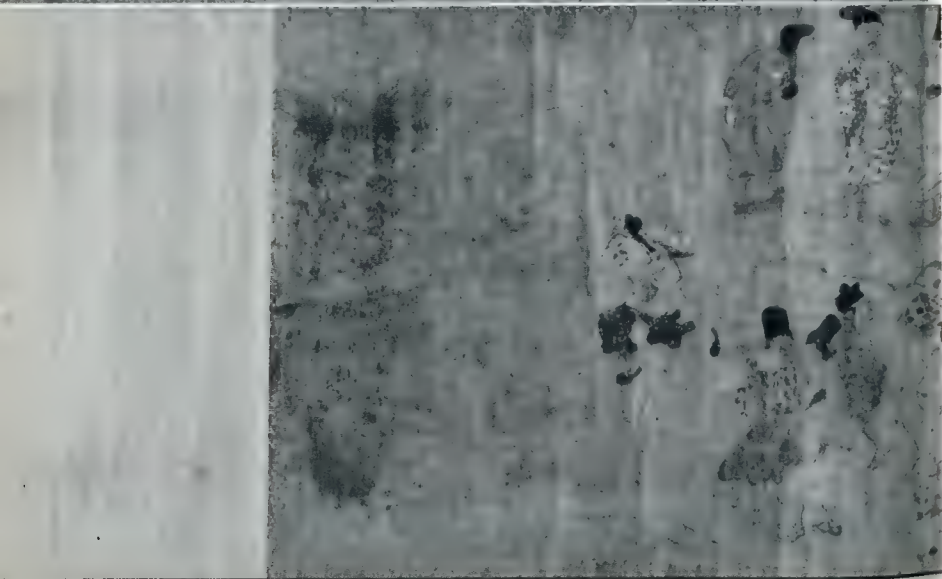
勾欄付五級の階の前、庭の上に荒薦を敷き、その上に束帯で威儀を正し、向うむきに坐っているのはこの邸の主人源信。夢にも知らない理由によって罪せられると聞き、無実を天に向って訴えているところである。つづいて鍵の手に折れ曲った室内には家人女房たちの歎きを描く。

上下より霞でせばめた空間を並行する長押、襖によって斜めに三室に分ち、その室内の情景を屋根や天井をとり去った吹抜屋台の技法で描いている。室内では老若の女子十五人が、主人の無実の罪を歎き悲しんでいる。さすがに奥の間の奥方らしき人はつつましく品位をくずしていないが、他の女房たちは髪を乱し、姿をくずして、かなり取乱してる。眼鼻こそまだ引目鉤鼻(下ぶくれの顔に、目は細い一線を長めに引き、鼻は小さく鉤形に描く。源氏物語絵巻がその代表的な例)の技法を残しているが、口だけは大きくゆがめられ、各人の泣きわめく表情が相当露骨に描かれている。上品な源氏物語絵巻とは大きな違いである。

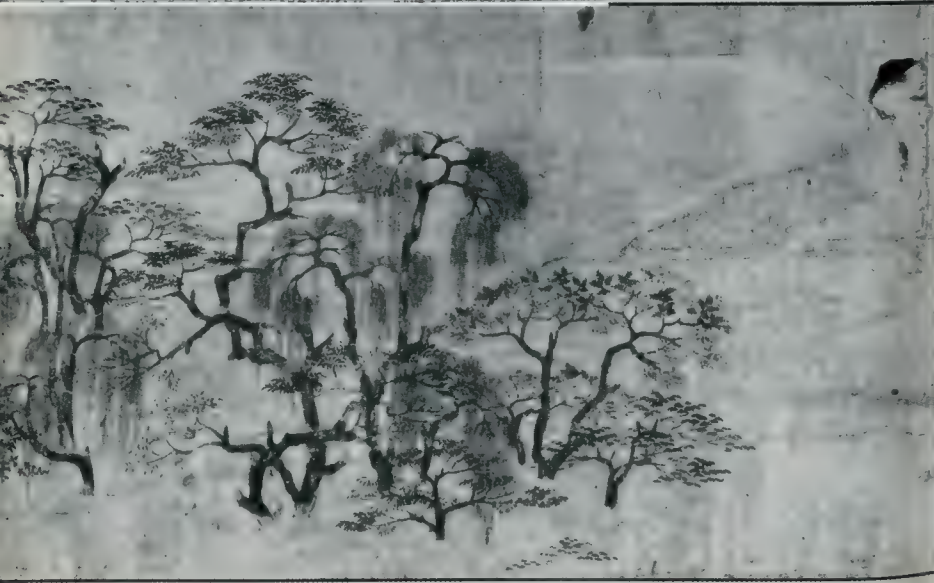
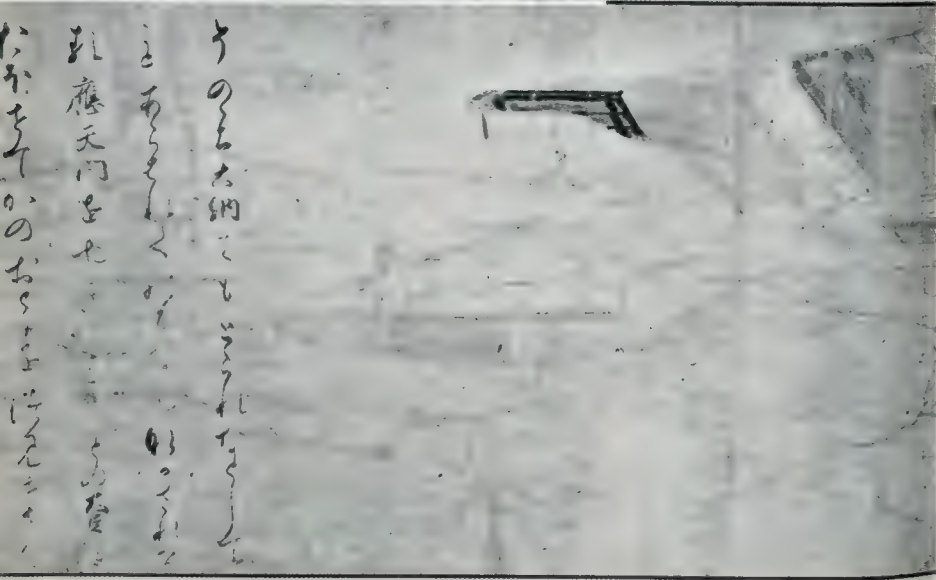
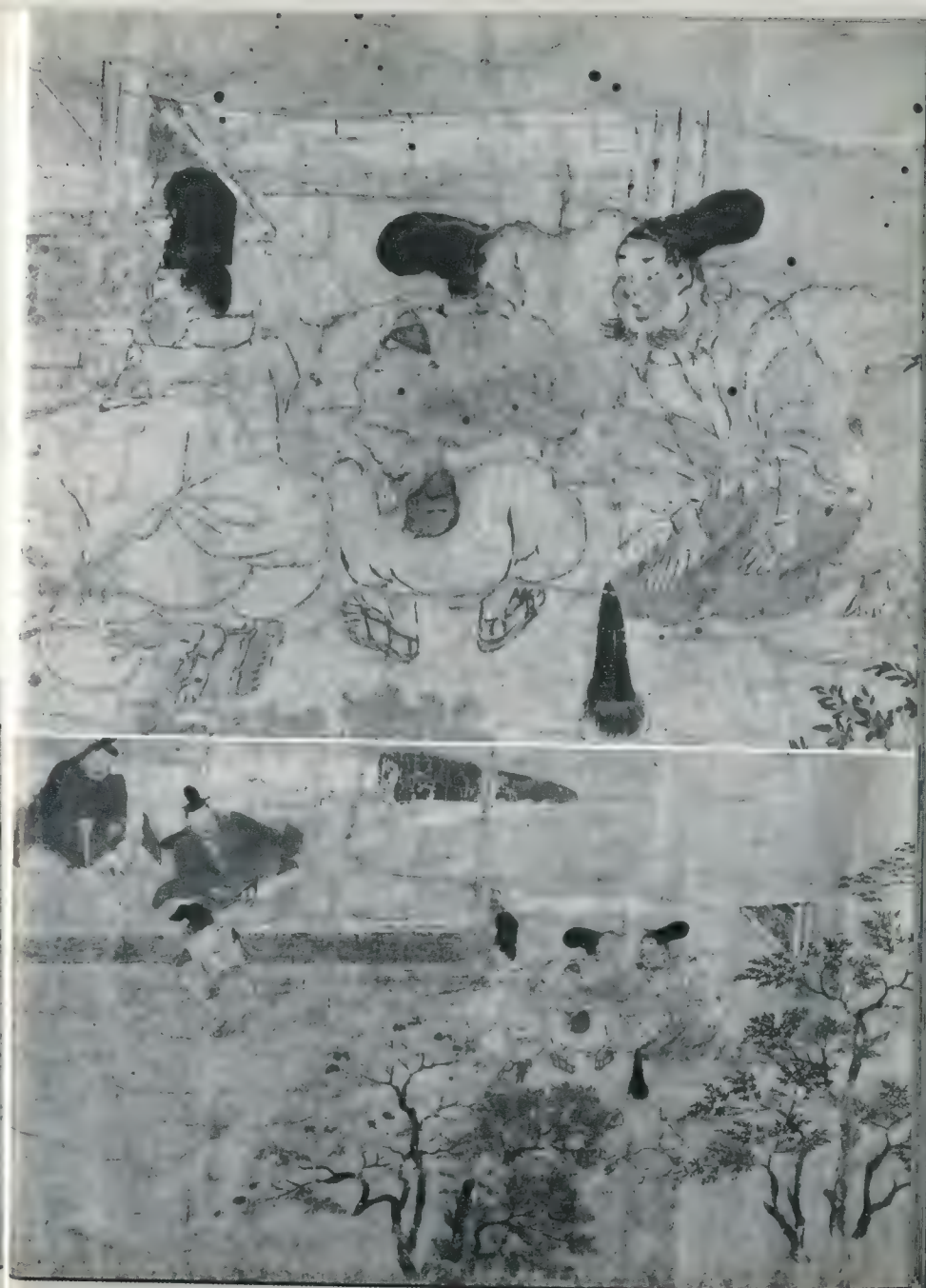
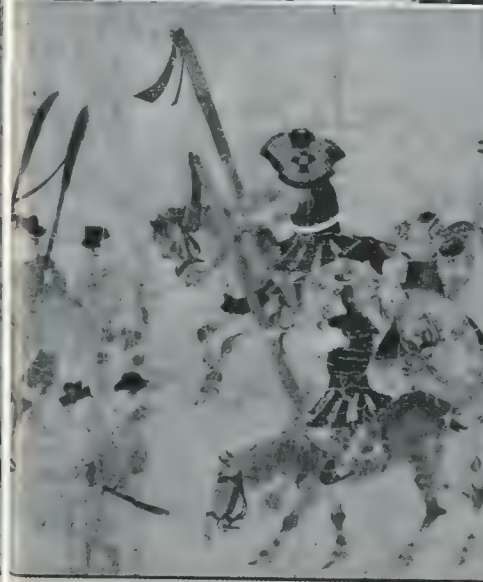
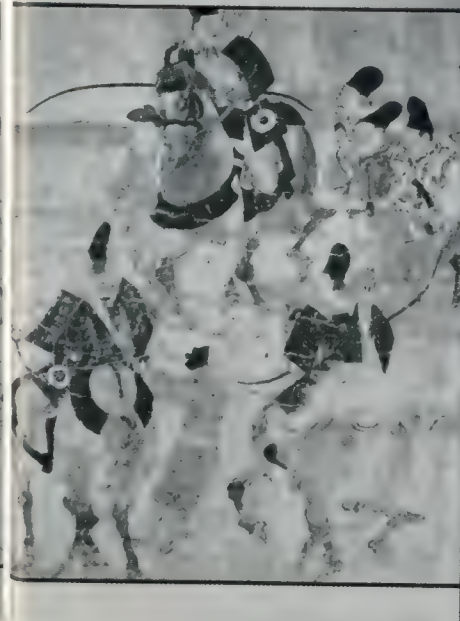
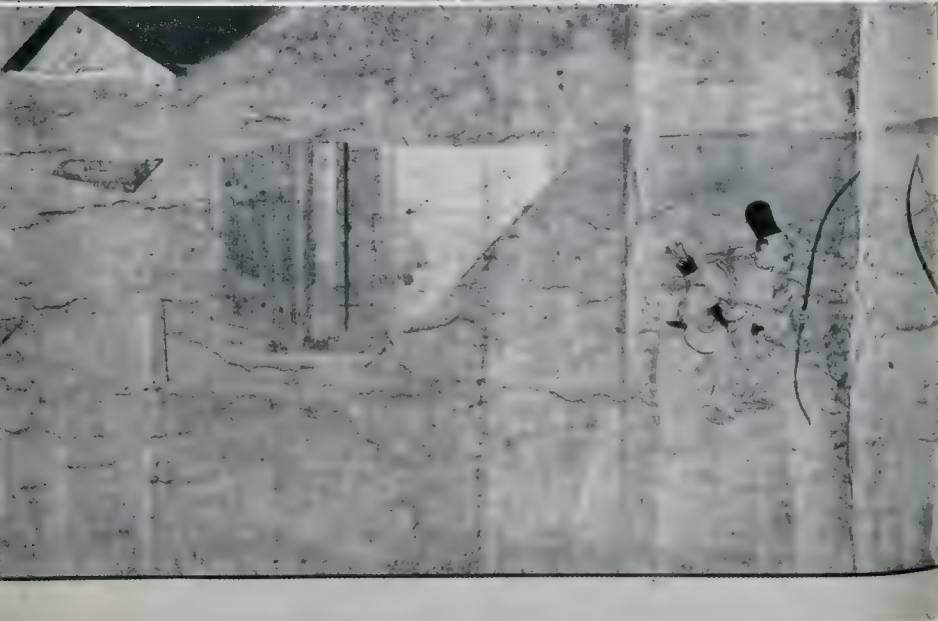
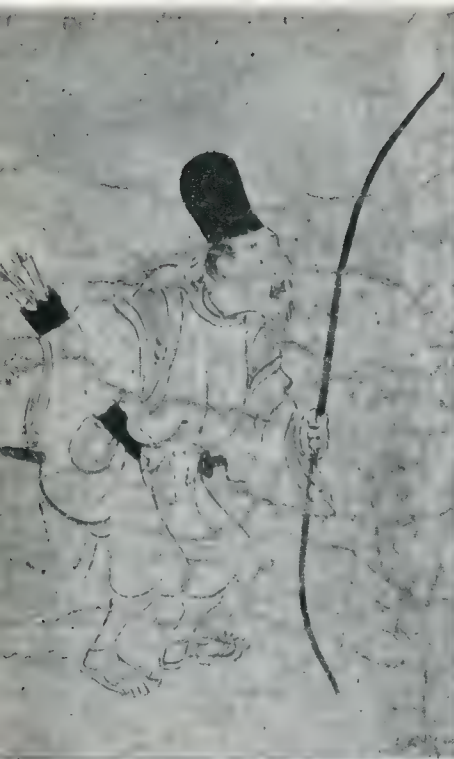
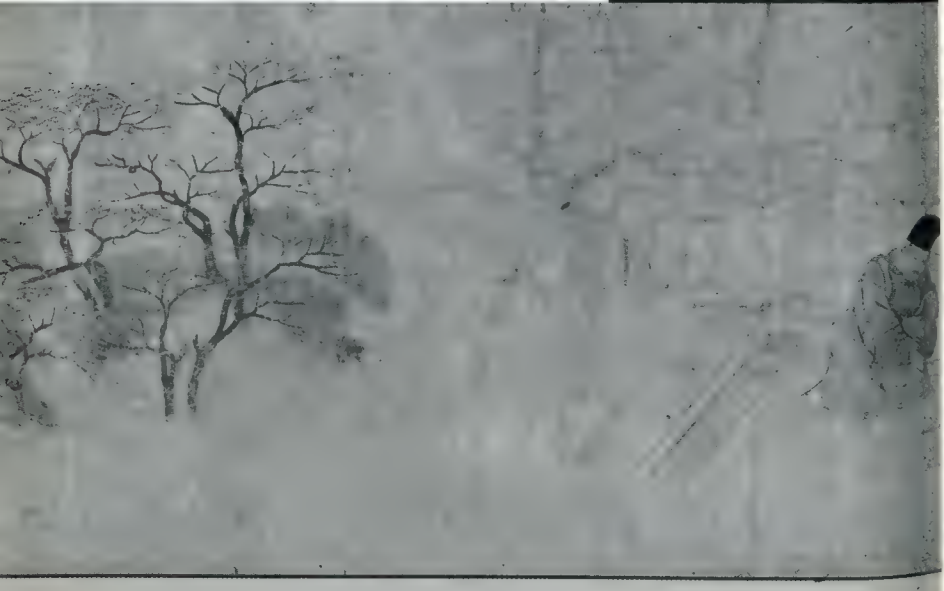
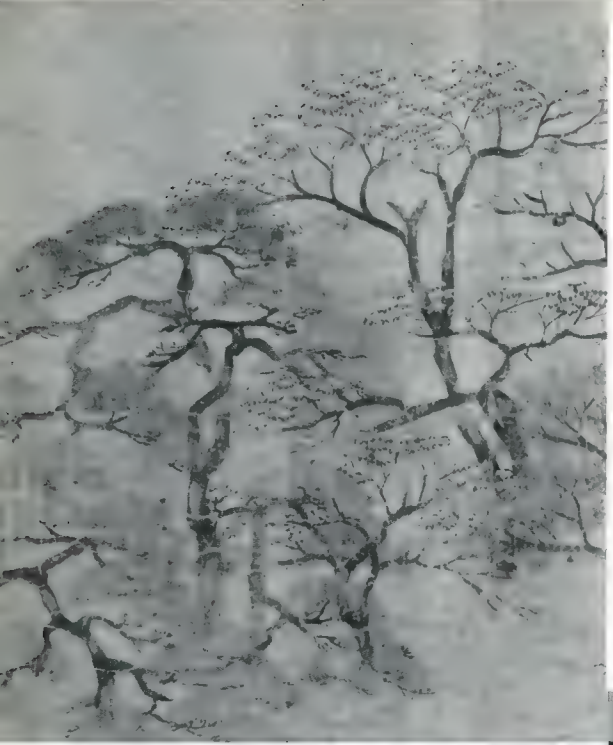
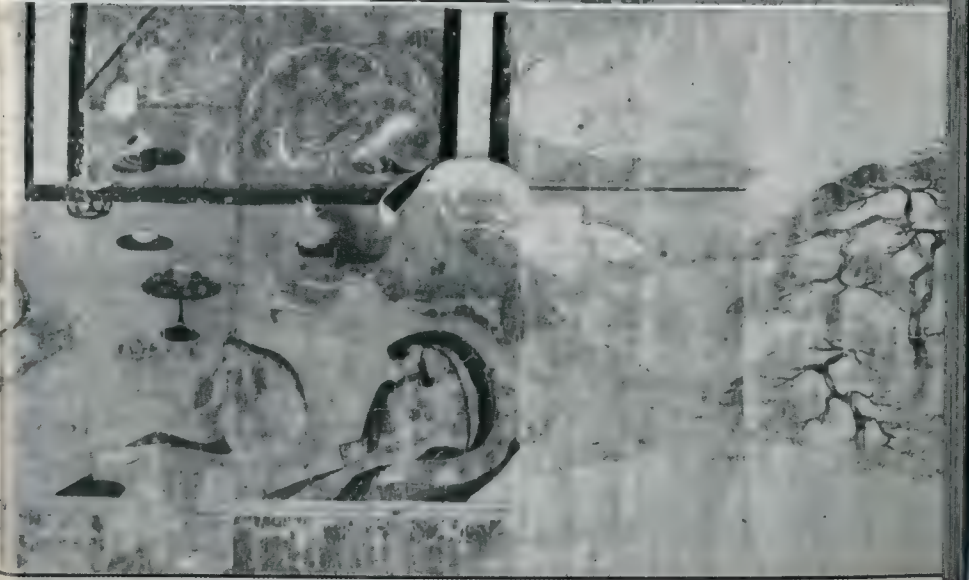
中巻第二段の詞書．この絵巻の中で最も長い文章である．応天門放火の真の犯人が伴大納言親子であり，その放火の現場を目撃したのが右兵衛の舎人というものであることを紹介している．そしてこの舎人と，その隣家に住む伴大納言の出納とのいさかいが端緒となり舎人が善男の秘密をもらすことが記してある．この詞はこのままでは意味不明の個所もあるが，宇治拾遺の本文によって明らかにすることができる．詞書の書風は前にも述べたように，線質に粘りがあり，運筆に重厚の風があるが，当時を代表する能書家の筆跡である．

(第二段・童の喧嘩)―この段の争いの顛末については、さきに二四頁のところで述べておいた。左頁画面上段は相長屋。この網代(あじろ)壁の家は右兵衛の舎人の家、次の頁のその隣家にあたる板下見の外壁の家は、伴善男の出納(すいのう)の家である。

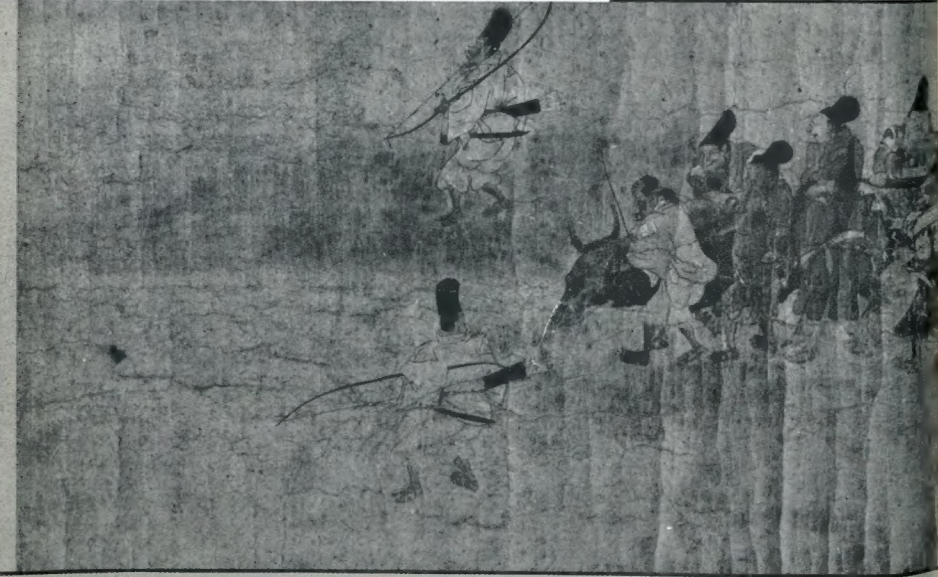
今しも舎人の家の前で二人の子供がつかみ合っている。向って左の藍玉模様の着物をきているのが舎人の子、相手の無地の着物をきたのが出納の子である。この二人の喧嘩の中に一方の父親出納がとびこんでくる。それは次の頁に―

生憎この喧嘩の場面が前頁と二つに割れたが、子供らの喧嘩のさ中に出納がとび出すところが第一景。その下方子供らを引分け、自分の子をかばいつつ相手の子を蹴飛ばすところが第二景。この一旦下った構図は反転して、左上出納の妻がその子をつれて家に駈けこむ図と相つづく。

画面右上のところ、大きな弧を描く群衆に囲まれた二人の男女がある。男は頭に折烏帽子、水干小袴の姿に腕組みをして立ち、女は小袖に前掛を締め両手を張っているが、どちらも大口開いて叫んでいる。これこそ舎人夫婦で、出納の仕打ちに憤懣やる方なくわめき立てているところである。舎人夫婦の絶叫に足を止めた人々は、舎人の何事か重大な意味ありげな言葉に好奇心をそそられ、やがてそれは囁きを生み、噂の波を生んで次第に広がって行く。

下　巻

（第一段・舎人の喚問）―下巻の第一の詞は、前巻のいさかいの一件が世に広まり、公けにまで聞えるようになったので、伴大納言の秘密を握っているらしい舎人の取調べとなり、一切が明るみに出されるいきさつを述べている。ついで画面は再び舎人の家の表口の光景から始まる。霞の波の

大きく舌をつき出した下に、道行く人々がいっせいに左の方を眺めている。二匹の犬もけたたましく吠えかけている。これはものものしい検非違使庁の下部たちが舎人の家に押しかけ、今しも舎人を引立てて行く有様にうち驚いているのである。戸口に立っている女は舎人の女房、下部の一人の話に応待しながら、拘引されて行く夫を見送っている。

舎人の家の表口、舎人が検非違使庁の下部たちに引立てられて行くところ。布衣(ほい)二人、水干三人の姿が見えるが、素足でその先頭に立っているのが舎人その人であろう。後をふり返り、戸口の女房に眼を向けている。一番後にいる下部が、女房を顧みて行手を指さしているのは、案ずる女房を安心させるためかと見える。その前方には、隣家のざわめきに何事が起ったかと板戸を少し開け、外の様子をそっと窺っている出納夫婦の姿が見える。この出納夫婦の傍から大きく差出た霞をへだてて、画面は紅葉をつけた木立となって次景に移る。その紅葉の朱の点々がわけて美しい。

前頁の木立は相つづいて、やがてこの頁の右兵衛の陣所の庭の木立となる。この木立と霞との間には舎人の拘引に向った四人の下部が控えている。そしてその前方、中央馬道（めどう）前の庭の上には舎人がひざまづいて、二人の判官から取調べを受けている。舎人は水干に藍摺の小袴をつけ、前頁の姿とは違っている。舎人は判官の取調べに対し、初めのうちは答えようとしなかったが、それでは汝も罰せられると聞き、ついにすべてを告げてしまった。

（第二段・伴大納言の配流）―舎人の告白により、伴大納言の罪状が明白となったため、事件はここに大詰となる、第二の詞書は『そのゝち大納言もとられなとして」ことあらはれてのちなんなかされけ」る応天門をやきてまことの大臣に」おほせてかのおとゝをつみせさせ」ていちの大納言なれはわれ大臣に」ならむとかまへけることのかへりてつ」みせられけむいかにくやしかり」けむ』と記し、伴大納言の罪が露見して配流される事件の結末が述べてある。かくて画面はまず流人の邸に向う検非違使の判官の一行から始まる。まず判官(次頁)は立烏帽子、白袴、紅の内衣を着て黒馬に乗り、前に三騎、後に三騎の随兵を従え、随兵はまた騎馬の替弓持、冑着の郎従等を引きつれている。

判官の横には馬の口取、鉾持、後には赤衣の火長が控え、総勢三十余人を数える。この部隊がたどりついた邸の前で、こちらに向って腰をかがめ、門内を指さして内の様子を隊長に報告している布衣の男は看督長である。さてこの絵巻は平安末期の風俗を知る資料として実に貴重なものであるが、その題材が京洛内の事件を扱っているため、その風俗はすべて洛中のものであり、かつそれが貴賤さまざまである点に特徴がある。この点信貴山縁起が主として地方の風俗を描いているのと対照的である。しかし事件の焦点が伴大納言の陰謀に注がれている関係上、検非違使庁の役人の風俗が最も入念に描かれている。従って衛府関係の風俗をただす上には最も都合のいい資料といわれている。

またも霞の間を縫うて先に進むと、門をすぎて邸内に入る。するとここにもまた一人の看督長がいて用向きを伝えている。相手の悄然とうなだれている老人は、これは大納言の家司であろう。立烏帽子に狩衣、指貫を下くくりにし、素足で庭におりたっている。かくして大納言家を襲う悲劇の雲はようやく濃くなった。庭内の霞はまた広がって家司の背後の家屋を覆い、つづいて松や楓を点綴しながら先へと流れる。楓の冴えた朱の色が一段とここでは眼にしみる。

漂う霞の間からやがて邸内の一室が現われる。これぞ主人の拉致された後の光景で、母屋に据えた帳台構の内には北の方が衾をかぶって打伏しており、手前には九人の女房たちが、或るものは顔を仰向け或るものはうつ向け、口を曲げたり、大きく開けたり、と
り乱して泣きわめいている。中には気を失ったのか、膝を抱いて呆然としているものもある。悲劇は前の左大臣邸の愁歎にくらべていっそう烈しく、画家はこの二つを巧みに描き分けている。

前頁の室内から流れ出る霞はわれわれを庭の木立から門に導き、主人を悲しく見送る四人の家の子のかたわらに運ぶ。前頁の女房たちと異り、男らしく、とり乱してはいないがさすがに主人を失ったものの悲しみは溢れている。門の上下をかすめる霞が外に流れ、あちこちに木立が散在している。この門の内外の木々はいま紅葉の盛りで、その紅の色が一段と美しい。非情な自然界の点ずる美しさが、却って人間界の悲しみをいっそう深いものに見せている。

前の頁の木立をぬけて前に進むと、伴大納言を捕えた検非違使の一行に追付く。この一行はさきの邸前のものをそのままここに移して、姿勢や組合せを変えた構図をとっている。前に見たのと同じように弓袋腹巻の騎者をしんがりにまた前と同様な随兵らとその郎従、そしてずっと前には顔見知りの判官の同じ騎上の姿などが見られる。さきの邸前の場合とちがって、流人を送る、いっそう、ものものしい光景である。流人の乗る牛車はこの前を静々と進んでいる。

先頭に二人の看督長が立ち、そのあとを流人を乗せた粗末な網代車がつづく。前には鞭をもった牛飼、轅をかかえた下部、あとには腰刀に手をかけた下部どもが車を囲んでいる。その車のうしろの簾は巻き上げられ、そこから僅かに袖と指貫の一部がのぞいて見える。この車の主こそこの物語の主人公、伴大納言善男である。「三代実録」の記事によれば、彼はこれから遠く伊豆の国に流されて行くのである。そしてこの流人追使の行列も粟田口のあたりまで進み、そこで近辺の送領使に引渡されることになるのであろう。かくて波瀾に富んだこの絵巻もついに最後の幕を閉じる。

伴大納言絵詞について

伴大納言絵詞(酒井家蔵)は三巻にわかれ、上巻（縦一・〇四尺、長さ二七・三三尺)は絵二段、中巻(長さ二八・〇九尺)は詞二段、絵二段、下巻（長さ三〇・四二尺）は詞二段、絵二段より成っている。このうち上巻のみ詞がないが物語の筋は中巻、下巻の詞書とほとんど同文の内容をもっている「宇治拾遺物語」巻十「伴大納言応天門をやく事」の条によって、その欠を補うことができる。その内容は別項で述べたように、伴大納言善男の応天門放火事件に取材したもので、こうした歴史上の逸話を題材としている点で絵巻の遺品の中でも特異の位置を占めている。その上この絵巻のもつ魅力は、その珍しく波瀾に富んだ物語を実にみごとに絵画化し、かつ絵巻の特質を活かして興味溢れるものにまとめあげている点である。

もともと絵巻物は構図形式の上から、これを段落式と連続式の二種類に大別することができる。段落式構図というのは插絵風の、画面を短く切ったものをいい、連続式構図はこれと反対に、つぎつぎと絵をかき続けた長い画面のものをいう。ところで絵巻物の特徴は、横に長くのびる絵画形式をそなえていることであるから、この独自の形式を活用して、この中に変転きわまりない画面を展開してこそ絵巻物の妙味は尽きるといってよい。そのためには断片的な段落式構図よりも連続式構図の方が、絵巻物本来の形式に適合するわけである。伴大納言三巻もこの連続式構図を用いて、物語の発展を巧妙に描破し、巻を披くにつれて刻々と変化する画面を展開した面白さは、まったく驚歎に値するばかりである。これは単に構図が巧みだというばかりではなく、同時に絵画としての描写の秀抜さにもよっている。その線を見ればかなり自由暢達の墨線で抑揚と変化に富み、豊かな感じを与える。この点「信貴山縁起」の系統をうけた優秀なものである。また色彩を見れば、一部にはかなり濃厚な作り絵で描かれているところがある。そこは「源氏物語絵巻」の系統に属するものと考えられ、要するにこの絵巻は源氏、信貴山の両様式の中間に立って、それをきわめて巧妙に処理したものであることが知られるのである。色は紅、緑、黄、朱、藍、群青、ときに金銀などを用いてその豊かなこと、美しいことは信貴山縁起以上である。豊かといえば、ここに登場する人物であって、高貴の限りより下賤に至るまで、実に多様に、かつ多数を描きわけている。おそらくこの絵詞ほど多量な人物を登場させ、人間社会の葛藤を活写した絵巻はないであろう。この点風俗的資料としての価値も高い。さてこうした秀抜な作品の筆者は誰であろう。近世の鑑定家はそれを光長に擬している。光長は平安末期の藤原隆能などと同時代で、宮廷絵所にも仕えた画壇の巨星であったから、これほどの傑作の筆者として擬せられたものである。従ってその製作年代も光長の活躍した平安末期と見られ、源氏、信貴山と並んで十二世紀を飾る傑作と見られている。

異時同図法

これは一瞥の視野に入る画面の中に，時間的に連続する幾段かの出来事を縮めて盛りこんだ構図法のことで絵巻の中でしばしば試みられている手法である．信貴山縁起は大仏殿に籠って祈ったり，眠ったりする尼君の宵から暁までの長時間にわたる行動を一画面の中に描いている．これに対し伴大納言の方は喧嘩の場に駈けつけ，自分の子供の喧嘩の相手を蹴倒す一人の男の極めて短時間の行動を一画面に描く．どちらも異時同図法の好例であるが，伴大納言の方が，その緊迫した時間における劇的な行動を描いていて，甚だ効果的だ．